

## はじめに

RSL センター センター長  
山下 王世

ゴールデンウィーク明けの 5 月 8 日、新型コロナウイルス感染症の位置づけが「新型インフルエンザ等感染症(いわゆる 2 類相当)」から「5 類感染症」に変更され、2023 年度はようやく名実ともにポストコロナの 1 年となった。立教サービスマーケティング(RSL)センターの活動もコロナ前の状況に戻ることができ、昨年度は単位付与なしでかろうじて実施した「RSL-グローバル(フィリピン)」についても、今年度は正課授業として全面再開することができた。実はそれだけではない。2023 年度はコロナ禍で経験したことから学びを得て、新たな試みが始まった一年でもあった。

サービスマーケティングは、社会の現場での活動と、教室における学問的な教育との結合を目指す実践型の教育プログラムであり、RSL センターでは、実践系 6 科目と講義系 10 科目が開講されている。実践系科目では国内外の様々なプログラムが展開されており、学生は文字通りサービスマーケティングを実践し、学びを深めることができる。社会に出て実際に体験することが学生たちの大きな成長につながるということは、極度に行動が制限されたコロナ禍でますます鮮明となった。ポストコロナ時代においても、かかる手間を惜しむことなく、現場での体験活動を最大限に生かした授業を続けたい。

一方、座学の講義系科目ではサービスマーケティングをそのまま実践できるわけではないこともあり、学生たちが能動的に考え、他人の意見を聞きつつさらに知恵を絞る環境づくりが大切である。2023 年度については、コロナ禍で得られた経験から新しいかたちの授業がいくつか試験的に行われたので、そのひとつを紹介したい。講義系科目の「カーボンニュートラル人材育成講座」は、ゲストスピーカーによる講義を受けた上で、グループディスカッションをしながらカーボンニュートラルに関する提案を考え、発表し、ゲストスピーカーや異なるキャンパスの学生たちから意見や感想をもらってさらに考えを深める、という内容で構成されている。この授業では池袋キャンパスと新座キャンパス、それぞれの教室で行われている対面授業を Web 会議システム(Zoom)によって同時接続し、学生たちがキャンパスを超えてディスカッションできるようにした。これまでは池袋は 7 学部(文学部、異文化コミュニケーション学部、経済学部、経営学部、理学部、社会学部、法学部)、新座は 4 学部(観光学部、コミュニティ福祉学部、現代心理学部、スポーツウエルネス学部)で議論してきたが、今年度はどちらのキャンパスにいても 11 学部に拡大された、より多様性のある環境の中で議論できるようになった。様々な視点をもつ者たちがひとつの答えを導き出すことは容易ではないはずだが、学生たちは仲間の考えに耳を傾けつつ熱心に取り組んだ。

科目担当者のひとり河村賢治法学部教授(新座キャンパスでの授業を担当)によると、キャンパス単位よりも全 11 学部での議論の方が学生の学びが深まることを目の当たりにしたのは、コロナ禍でのことだったようだ。講義系科目が全てオンライン授業となった 2020 年度は、学生たちは異なるキャンパスの授業を 1 時間弱かかる移動時間を気にすることなく積極的に履修した。その結果、多くの全学共通科目で池袋と新座の学生がこれまでになく混じり合っ一緒に履修することになり、そこで行われた議論がより複眼的な視点にたったものになったのである。その後、対面授業が再開されるとその環境は姿を消してしまうのだが、今年度の「カーボンニュートラル人材育成講座」では、Web 会議システムを利用して、キャンパスを超えた議論ができる環境を再び創り出したことになる。コロナ禍で経験した全面オンラインではなく、対面授業の利点を保持しようと、両キャンパスそれぞれの教室をオンラインでつないだところもコロナ禍からの経験が生かされている。RSL センターでは実践系科目が注目を浴びやすいのだが、講義系科目にも年々磨きがかけているというグッドプラクティスの一例としてご紹介した。

2023 年度、さらなる充実をとげた授業が展開されたのは、科目担当者の先生方やゲストスピーカー、学生受入れ協働先機関の皆様の真摯なご尽力、ならびに教育研究コーディネーター、TA/SA、そして職員の皆様のきめ細やかなサポートとチームワークあってこそである。心から感謝を申し上げたい。